

歌は正月をつくり 正月は歌をつくる

大阪府文化財センター
理事長
みずのまさよし
水野 正好



新しい政治の幕開けを願う孝徳天皇（在位645〜654年）は、都づくりの進む難波宮で初めての正月を迎えられました。元旦は甲子の日、初甲と初子が重なる目出たい日だけに天皇は大喜び。この日、天皇は賀正の儀式をすませ、大化の改新の方針を告げます。陽気溢れるスタートという雰囲気です。

前年十二月に遷都したばかり。大極殿はなく仮の四阿殿と広く囲む白い衣幕が天皇と数多くの官人を容れます。賀正の儀式では、四阿殿に天皇・皇后が着座されると、皇太子が前へ進み出、「新しき年の、新しき月の新しき日に、萬つの福を持ち参り拝み供え奉らむ」と奏上、天皇は侍従に「新しき年の、新しき月の新しき日に、天地と共に萬つの福を平しく永く受け賜れ」と応えさせます。つづいて居並ぶ親王から王臣、天下百姓を代表して奏瑞者が吉兆を、奏賀

者が祝賀の言葉を奏上、対して侍従が先と同じ言葉で応えます。実に厳粛な儀式です。もちろん、外国使節団も臨席、同様に萬歳を唱和しています。

今から5年前、大阪市中央区の難波宮跡で、墨痕鮮やかに「春草の始めの年」と歌の前半をしたためた和歌木簡が発掘されました。失われた続きの句にふさわしいのは、正月十四日の「踏歌」での句です。天皇が大安殿で群臣に酒宴を開き琴鼓を奏させる中、皆が「新しき年の始めにかくしこそ 仕えまつらむ萬代までに」と唱和する句がそれです。重ねると、「春草の始めの年にかくしこそ 仕えまつらむ萬代までに」となります。大化二年正月一日の朝賀式の後宴で、新都の造営、順調な工事の進展、天皇への忠誠を、官人達が一斉にこのように歌う機会があったのです。

当時、仁徳天皇（5世紀前半）の御製とされる難波曲―「難波津に咲くやこの花冬籠もり 今を春へと咲くやこの花」の歌が各地の春の宴席で歌われていました。宴席で天皇や都、初春に一層新鮮な靈力をつけ加える歌でした。こうした靈力は、4516首の和歌を収めた萬葉集にもみられます。萬葉集の最後の歌は

大伴家持（718〜785年）が国司として赴任した因幡国の国庁で、正月一日に歌い上げた「新しき、年の初めの初春の 今日降る雪のいや重け吉事」の一首です。仕える郡司や官人達に宴を設け、歌っています。国司である家持は天皇の統治の体現者です。年末の大祓で心身を清め、大殿祭で庁舎を浄めた天皇と同様、始めて因幡で迎えた元旦は、彼も清浄な国庁で正月一日を迎え、因幡の人達と、賀正の儀式のあと新年を寿ぎ吉事の続くことを祈っているのです。

古代、歌は言霊が溢れ働きかける強い存在でした。口から耳へ、五感へと新年の喜びが浸透します。正月とは、待たれ、用意しつくされて迎え、その中で、幸せや希望を生み出す一瞬でした。皆様のこの新しい一年の吉事とご多幸、苦難を超える力の萌出る勢いを祈り上げます。

（略歴）

1934年大阪府生まれ。大阪学芸大学卒業。滋賀県、大阪府教育委員会勤務。文化庁で文化財行政担当。1979年、奈良大学着任。文学部長、学長を歴任し、現在は奈良大学名誉教授。著書に、『鳥国の原像』（角川書店）、『古代を考える・河内飛鳥』、『継体天皇とその時代』（ともに吉川弘文館）などがある。